

A-Forum の期待



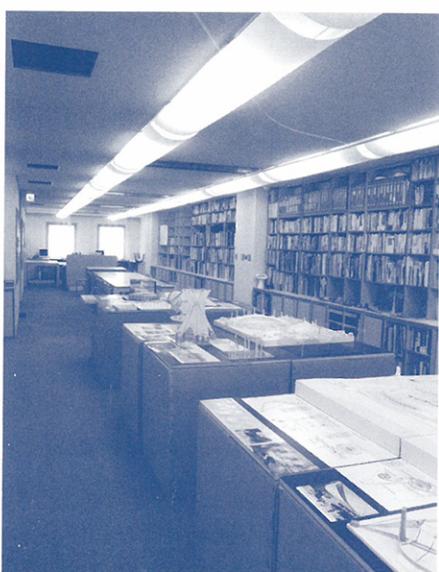
神田 順

アキニアリング・デザインという言葉が定着しつつある。斎藤公男先生（日本大学名誉教授）が建築学会の会長の時(2007-2008)から、建築と工学の融合を意識して、よりよき「建築」への試みとして、講演会や展示を進めてこられた。その理念を実現するための場として、A-Forum が生まれたと理解している。A はアキニアリング・デザインのAである。

昨年12月、お茶の水の地に50坪ほどの空間が、アキニアリング・デザインに興味ある者たちのために作られた。コアメンバーは、斎藤先生の他、和田章先生（東京工業大学名誉教授）、金田勝徳博士（構造計画プラスワン主宰）と筆者の4人で、他の数人と、運営委員会を構成し、どのようなことが出来るか議論しながら活動を始めている。

すでに200人を超える方がフレンドとして登録され、何らかのかたちで、A-Forum に足を運ばれたということである。フレンドにはメールマガジンが配布される。ほぼ月1回のペースで発行され、コアメンバーによるコラム、そしてイベントなどが報告される。コアメンバーの蔵書が登録され書架に並んでおり、閲覧できるようになっているのも、知的な刺激になっている。第1回フォーラムとしては、筆者が企画した「専門家として建築主に安全をどう説明するか」というテーマで、パネリストに江尻憲泰氏と高木次郎氏をお呼びして2時間にわたる討論とさらに懇親会でも議論を楽しんだ。

空間のデザインにおいて構造工学はその根幹にかかる知恵であるが、現代の社会の中で、それが実現するためには、経済的、法律的な制約をクリアしないといけない



ので、ともすると、それで手一杯になってしまふような状況がある。「強・用・美」のバランスを取りながら、建築主のみならず、社会に歓迎される空間をどのようにして生むか、知識も知恵もフル稼働さ

せることが必要である。もっとも個別のプロジェクトでオープンに議論できないこともあろうが、多くのプロジェクトに共通することも少なくない。

構造を設計するということは、特定の場所に特定の空間を生み出すわけで、その固有性を、建築主が満足する形で、かつ社会的に役割を果たすことが求められる。筆者の興味は、相応しい安全性の達成であり、それをどのようにして説明できるかであるが、往々にして法規制に適合することに頼り、自らの考察や判断が組み込まれないとすると、マニュアル化された作業に過ぎなくなる。科学的、工学的知見を踏まえ、材料の性質や施工性をもとに、創造性を發揮するというのは、何も物理的な空間としての形の新規性に限定されるものでない。

ただでさえ新築物件の少なくなった時代に、仕事を選ぶなどということが出来ない現実の中で、より良い建築のために設計に手間暇かけることは容易ではないかもしれない。経済成長の時代でないことを承知はしながらも、効率的に無駄なコストを省いた建築を求める状況は少なくない。建築主が空間創出という行為に対して、どの程度の社会的な責任を意識するかということは、単にモラルということだけでなく、社会の一員として、いかに社会を豊かで心地よいものにするかということでもある。それを法規制によらない安全水準という話につなげるには、じっくりと対話が積み重ねられないといけないということにもなろう。

抽象的な、科学・工学の話でなくとも良い。過去にも、多くの先人は、さまざまな形態を生み出した。国立代々木競技場やシドニー・オペラハウスのように、建築家と構造技術者が設計プロセスの中で形を生み出して行った例から、多くを学ぶこともできる。免震や制振の新しい技術が開発され、鋼材やコンクリートも高性能化が図られ、技術はますます可能性を広げる力を蓄えているが、その意味を、その役割を認識しないと、豊かさは生まれない。

議論すれば何かが生まれるというものではないかもしれないが、問題を共有し、さまざまな工学の視点から建築を考え、知恵を絞ることは、設計を生き生きとしたものに変えて行くことが期待される。そうした議論の場として、多くの経験を有する者やまだこれから構造始めたばかりの人まで自由に集い、語る場が、誕生したことだと思う。知的興奮が心地よさを生む場として、コアメンバーの一人としても今後の展開に大いに期待を膨らませている。